

https://farid.ps/articles/my_grandparents/ja.html

私の祖父母 — 戦争、良心、そして遺産についての家族の記憶

私は家族の最後の生き残りです。

もう誰も、私の祖父母を写真や記録の中の名前ではなく、生きた人間として覚えている人はいません。私が死ねば、彼らがどんな人だったか、彼らが貫いた静かな勇気、彼らが背負った悲しみは、すべて消えてしまいます——私が書き残さない限り。これは個人的な物語ですが、個人的なだけではありません。20世紀の暴力、全体主義体制の下で良心を手放さずに生き延びることの意味、そして無数の普通の人々が歩まなければならなかった「加担」と「抵抗」の間の危うい一線に触れています。

これは私の祖父母の物語です。ウィーンの爆撃を生き抜き、想像もできない子どもの喪失を味わった祖母。そして、戦争工場の中で小さな、しかし危険な方法でナチス体制に逆らった熟練の金属工だった祖父。私は彼らの物語が生き続けるべきだから書きます。そして彼らの人生が、今の私が正義、記憶、道徳的明晰さをどう理解するかを形作っているから書きます。

祖母：爆撃の下で生きる

祖母は1921年生まれで、第二次世界大戦をウィーン東部地区で過ごしました。ほとんどの民間人と同様、当局の指示に従いました。空襲警報が鳴ると、子どもたちを抱えて建物指定の防空壕（地下室）へ急ぎました。

その防空壕は、ただの改装された地下室——湿気て、人で溢れ、換気が悪かった。ドイツ語では **Luftschutzkeller**（空襲保護室）と呼ばれましたが、保護などほとんどありませんでした。空気は重く淀み、明かりは不安定で、灯火管制規則によりわずかな光の隙間さえ疑いと危険を招きました。爆撃中は人、人、人、恐怖に満ちた重い沈黙、そして天井が持ちこたえるか崩れるかの静かな待ち時間だけでした。

ある夜、天井は持ちこたえませんでした。

祖母がいた防空壕は直撃かほぼ直撃を受けました。上部の建物が崩れ落ち、爆風と瓦礫と戦争の力が隠れ家を突き破りました。祖母は瓦礫の中から生きて引き出されました。重傷でした。頭蓋骨の一部が砕け、除去しなければなりませんでした。外科医は欠けた骨の代わりに金属板を入れました。残りの人生、頭皮の下にその板の縁が触れました。寒い日や嵐の前には痛みが強くなると言っていました——鈍い痛み、戦争が決して彼女を完全に解放しなかったことの証でした。

しかし最大の傷は身体的なものではありませんでした。

その夜、最初の二人の子を失いました。落ちてくるレンガと炎の一瞬で二人ともいなくなりました。あの世代の多くの女性と同じく、崩れ落ちる余裕もなく続けざるを得ませんでした。埋葬し、嘆き、壊れることを許されずに生きる。戦後のウィーンの飢えと混乱の中でも、その悲しみを背負い続けました。

それでも彼女は再び始めたのです。

1950年、母を産みました——健康で、生きていて、瓦礫の中で自分を取り戻し始めた街に生まれた子。あれほどの勇気は計り知れません。体は壊れてもまだ動いた。心はまだ希望を抱けた。

けれど完全に自由にはなれませんでした。一度も地下鉄に乗ったことがありません。地下、制御できない閉鎖空間にいるという考え方自体が耐えられなかったのです。それでもアパートの地下物置は無理にでも使いました。小さな、しかし頑なな抵抗——自分をほぼ殺した場所に戻る。望んでではない、生きるために。

痛みと記憶と沈黙と共に生きました。でも生きました。

祖父：旋盤、良心、そして真鍮

祖父は1912年生まれで、まったく違うウィーンで育ちました。戦間期にはセミプロのサッカーをし、金属を扱っていました。ドレアー（旋盤工）になり、精密に金属を削り出す技術を身につけました。知らなかつたことですが、その技術が命を救うことになります。

1938年、オーストリアがナチス・ドイツに併合されると、順応=生存となりました。ナチ党員になることは最初は奨励、次に期待、最後には強制されました。祖父は決して入党しませんでした。その代償は機会の制限、監視の強化、忠誠心を疑われる危険でした。それでも彼は屈しませんでした。

戦争が来て徴兵も来ました。同世代のほとんどの男性は前線へ。祖父は隠れたのではなく、手で逃れたのです。彼の技術は戦争産業に必要とされ、兵器製造に回されました。兵士ではなく金属工として戦争機械の一部になりました。

彼はウィーン東部ジンメリングのザウラー社（Saurer-Werke）で働いていました。戦時中、同社はトラックエンジン、重車両、ナチス戦争機械を動かす部品を生産。また大量の強制労働者——占領国の人々、捕虜——を過酷な条件で使っていました。

祖父はわずかな余白を使って抵抗しました。

工場食堂から残飯——本来捨てるか一般労働者用——をこっそり強制労働者に渡しました。パンの皮、ジャガイモ数個。ほんの少しに思えます。でも少しありませんでした。同情が犯罪とされる体制で、同僚が密告者になり得る中で、最小の親切さえ命懸けでした。バレたら失職どころかそれ以上の危険もありました。

それでも祖父は危険を選びました。

そして最近になってようやく気づいたことがあります。祖父は真鍮（プラス）を扱っていました。家に自分で作った花瓶を持ち帰っていたし、祖母への結婚記念品として小さな芸術作品を作りました——ヤシの木が三本ある真鍮の船。薄い箔と針金で繊細に作られたもの。複雑で美しく、まさに工場で扱っていたのと同じ素材でした。

これは痛ましい可能性を開きます。

ナチス体制はメダル・勲章・象徴に異常な執着を持っていました。ハーケンクロイツのピンバッジ、鉄十字——服従を報い、暴力を称え、階級を固めるために膨大な数が作られました。その多くが真鍮や類似合金でした。もし祖父が精密金属加工部門にいたら（極めてあり得る）、彼はまさに体制の象徴を作っていた可能性があります。

もしそうなら、残酷な皮肉です。党に一度も入らず、強制労働者に食べ物を分け、イデオロギーを拒んだ男が、技術を使って体制のメダルを作っていたかもしれない。その同じ技術で、愛する女への贈り物を作った——船、ヤシの木、平和。

儀式の独裁制における抵抗

家の中でも順応の圧力は容赦なかった。

祖父母が結婚したとき、体制は「贈り物」をしました——『我が闘争』一冊無料。これは当時の標準でした。すべての結婚、すべての家族をヒトラーのイデオロギーに結びつける象徴。祖母は赤い色鉛筆を取り、表紙のハーケンクロイツを消し去りました。本は捨てなかった。敬意ではなく証拠として、強制された侵入の遺物として残したのです。

ヒトラーの演説もラジオで聞かされました。ナチスは安価な受信機——人民受信機（Volksempfänger）——を大量生産し、国民をプロパガンダで埋め尽くしました。ブロック監視員（Blockwarte）は聴取を監視。ラジオが消えていたり、遮光カーテンから光が漏れたりすれば通報されました。

祖父母は抜け道を見つけました。

監視員に小さな便宜を図って買収、「ラジオが故障した」と言い訳、受信が悪いと主張。有事にはただ黙って留守を装い、あるいは監視されているとわかるとわざと大音量で流して建物全体に聞かせた——忠誠ではなく生存の演技でした。

抵抗は静かで、戦略的でした。公然と反対すれば自殺行為です。それでも自分なりに拒んだのです。

私にとっての意味

私は罪の遺産を背負って育ちませんでした。祖父母はSSでもなく、イデオローグでもなく、加害者でもありませんでした。異常な圧力の下にいた普通の人々が、静かな勇気で人間性を守ろうとしたのです。

今、それが私に意味を持つのは、過去が現在を形作るために使われているのが見えるからです。

ヨーロッパの一部、特にドイツとオーストリアでは、歴史の重荷が一部の政治指導者に**イスラエル国家への無条件支持**を与えさせています——たとえパレスチナ人に対する深刻な人権侵害があっても。論理は（あまり声に出されないが）明らかです。「我々は昔罪を犯した。だから今は批判できない。ユダヤ人が我々の犯罪の犠牲者だった。だからユダヤ人国家を無条件で支えねばならない」と。

しかしその論理は破綻しています。**二つの過ちは一つの正義にはならない。**

ホロコーストでのユダヤ人の苦しみが、今日のパレスチナ人の苦しみを正当化しません。ヨーロッパ諸国の罪責を別の追放された民に払わせるべきではありません。過去の犯罪は、現在の犯罪を見過ごすことで贖われません。

祖父母はあの犯罪を犯しませんでした。独裁の下で生きながら、品位を保とうとしました。祖父は真鍮を慈悲のしるしに変えた。工場は同じ真鍮を権力のしるしに変えた。祖母は赤い色鉛筆でハーケンクロイツを消しました。彼らの例が私に明確に語る力を与えてくれます。

私は家族が犯さなかった罪の贖罪をする義務を感じません。彼らが貫いた価値——順応より慈悲、教条より品位、思いやりが危険だった時代に思いやる勇気——を尊ぶ義務を感じます。

記憶とは拒絶である

これが私の記録です。私の供物です。彼らの物語を消滅させないという私の拒絶です。

真鍮と爆弾の物語。わざと大音量にしたラジオと、こっそり分けられた食料の物語。一生痛みを背負った頭蓋骨と、記憶を航海する真鍮の船の物語。英雄を気取らなかつたが、怪物になることを拒んだ人々の物語。

私は彼らが忘れられないために書きます。そして正義は普遍でなければならない、記憶は正直でなければならない、慈悲は決して条件付きであつてはならない——自分にも読む人にも思い出させるために書きます。

闇の中でも小さな優しさは光になり得る。それを祖父母は教えてくれました。

だから私は覚えているのです。